深根輔仁『掌中要方』について

——尊経閣文庫所蔵の古文書中に残る逸文——

○石原　武　小曽戸　洋

わが国現存最古の医書は『医心方』であるが、それ以前にもすでに『大同類聚方』『難経開委』『金蘭方』『掌中要方』『養生抄』『集注太素』といった医書が撰述されていたことが知られている。しかしこれらはすべて亡失し、いかなる内容をもつものであったかについては、これまで全く窺うすべがなかった。ところが最近演者らは、このうち深根輔仁の撰と伝えられる『掌中要方』の内容が部分的ながら尊経閣文庫所蔵の失名医書中に伝存していることを見い出した。『医心方』をはるかに溯る医書の逸文の出現は、日本医学史研究上きわめて重要な意義をもつと考えられる。よってここにその概要を報告する。

一、深根輔仁と『掌中要方』

深根輔仁は『本草和名』の著者として知られるが、その事蹟については①『日本紀略』延喜十八年（九一八）九月十七日条に「右衛門医師深根輔仁撰掌中要方」、②『類聚符宣抄』巻九の侍医時原興宗の処分請状〔延長三年（九二五）二月〕中に「典薬頭菅原朝臣行貞門徒権医博士深根輔仁」、③『法曹類林』巻二百には承平六年（九三六）十二月の記事として「侍医滋根輔仁問」、④『和名類聚抄』の源順序に「大医博士深根輔仁奉勅撰集和名本草」などとある。したがって④から官は大医博士まで至ったことが知られ、①から右衛門医師の地位にあった九一八年九月に『掌中要方』を撰述したことが知れる。この書は鎌倉時代の成立になるとされる『本朝書籍目録』に見える「『掌中方』一巻、深根（源）輔仁撰」と同一書であることは疑いなかろう。

二、尊経閣文庫所蔵の失名医書（第六号）

㈶前田育徳会尊経閣文庫には、巻首の欠損によって書名を逸した医書が数点あるが、このうち「正応四年（一二九一）八月五日書写了　守長花押」の奥書を有する古鈔巻子本がある。守長は丹波守長のことで、『丹波氏系図』によると、従五位下、典薬助の位にあった。

本書は全五紙を存する。一紙は一六界であるが、およそ

一界に双行宛書かれている。第一紙から第四紙前半までは「病愈後禁忌」「皰瘡発年」「年々記」「天平官符」などの項目で、痘瘡関係の記事が列記されているが、本報で問題とするのは第四紙後半以下の医方書である。

さてこの部分には後掲の五つの治病項目があり、各項に第幾と項番号が付されていることから、一見してある医方書からの抜抄であることが知れる。種々の六朝隋唐の医薬書から類抄してあるが、薬物名・病名に和名が付されるところからすると本邦の所撰である。和名は『本草和名』の記すところと一致する。末尾には「上件条之治方、多載掌中方。仍更不遑抄、披本書可知也」という識語がある。すなわち演者らがこの部分を深根輔仁『掌中要方』からの抜抄と判定するに及んだゆえんである。

三、逸文部の構成

〈避時気疫病法第百七〉　まず「出病源論」として現伝『病源』巻九時気候の冒頭を引く。次に「已上出霊奇方」として治方七方を引用。このうち六方は『医心方』巻十四にも見える。次に「出陶景本草注」として一方、さらに「出崔禹錫食経」として一方を引く。最後の一方は出自未詳。

〈傷寒豌豆瘡方第百八〉　首に『病源』巻七の傷寒登豆瘡候から引用。「出病源論」を脱す。「已上千金方」が七方、「出梅略方」「已上極要方」「出経心方」がそれぞれ一方。

〈豌豆瘡後滅瘢方第百九〉　首に『病源』巻七の傷寒登豆瘡後滅瘢候を引用。次いで「已上千金方」が四方、「新録方」が三方。

〈治時病後労復方第百十一〉　首に『病源』巻九の時気労復候を引用。次いで出自未詳の方が数方。

〈時行後洗手梳頭致復方第百十二〉　「出千金方」として現伝『千金方』巻十、労復第二から論を引用。

四、結語

『医心方』を溯る七十年近くも前にすでにこのような形態をとる医方書がわが国で著わされていた。全体がわからないので断定的なことはいえないが、『医心方』との重複は意外に少ない。しかも『掌中（要）方』は文字通りハンドブックの医書で、巻数も『本朝書籍目録』の記すように一巻であったろう。したがって『医心方』の種本となったことはありえないまでも、『医心方』の編集法に影響を与

えたことは当時の舞台背景からみてほぼ確実である。『掌中方』もまた『外台秘要方』の編集アイデアに由来する可能性が高いが、ともあれ、わが国独自の医方書の嚆矢として、今後研究に値する貴重な資料と考える。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究室）

呉家の本家筋、豊田家の医師たち

○豊田裕治[1]　豊田秀三[2]　石田純郎[3]

呉秀三の論述の中に、呉家の先祖は豊田姓を名乗っていたとある。呉一族が、中央に出て華々しい活動を行ったのに対し、豊田一族は故郷・呉にとどまり、地域医療に尽したのである。本日は呉秀三の父である呉黄石のいとこにあたる豊田立碩（りゅうせき）と、その実子実頴（みとし）と昭雄（てるお）を中心に述べたい。

呉秀三の曽祖父が、豊田隆平（伊予中島出身　一七六一（?）～一八二一）であり、医師として働き、荘山田村（現呉市の中央部山の手）に移住し、沢原家の娘と結婚した。その長男が山田黄石（荘山田村生れ、一七八八～一八二七）で、呉氏の始祖となり、次男が沢田屋金左ヱ門（荘山田村生れ、?～一八五九）（薬種商）で、新家沢原を名乗った。金左ヱ門の三男が、もとの豊田姓にかえり、豊田倍次郎、後の立碩である。

立碩（りゅうせき）は、文政六年（一八二三）二月六日、荘山田村に生